

主 題：「建築家」として生きる信仰者⑦：建築現場

聖書箇所：ローマ人への手紙 4章1－12節

この朝、続けて見ていきたいことばは、ローマ人の手紙14章です。先週から私たちは、このローマ14：1－19を通して、教会という建築現場で起こる問題について考え始めました。前回も言いましたが、罪人が集まる教会にはさまざまな問題が起こります。もちろん私たちが互いに罪を犯し合うことによって、争いや分裂が起こることもあります。でもそれだけではありません。時には、え？そんなことでと思うようなほんの小さな違いが原因で、教会に大きな問題が起こることもあります。先週、メッセージの準備をする中で一つの記事を見つけました。その記事は、アメリカの教会で実際にあった争いについて紹介するものでした。たとえばある教会では、教会の書類を入れるキャビネットを買うことをめぐって争いが起きました。黒色にするのか、茶色にするのか。2段にするのか、3段にするのか、それとも4段にするのか。そのことで教会員が激しく議論したのです。またある教会では、教会のコピー機をだれが使って良いのかということめぐって争いが起きました。別の教会では、コーヒーに入れるためのシロップを持ってきた女性が叱られました。なぜかと言うと、シロップの入った容器がお酒のように見えたからです。加えて別の教会では、礼拝の司会者が礼拝中に靴を履いているべきかどうかをめぐって争いが起きました。そんな些細なことで争うのかと思いませんか？キャビネットの色に、コピー機に、コーヒーのシロップに、司会者の靴。いや、もっと大事なことがあるでしょうと、私たちは笑うかもしれません。でも私たち自身、笑えますか？確かにここまで極端なことは、私たちのうちには起こっていないかもしれませんが。それでも私たちの間にもいろいろな違いが存在しています。家庭での過ごし方、仕事や子育てに対する考え方の違い、教会での奉仕のやり方の違い、小さなものから大きなものに至るまで私たちはそれぞれにいろいろな考えを、意見を、またこだわりというものを持っています。

では、そんな違いを目にする時に、果たして私たちは普段どのように応答しているのでしょうか？大切なのは、違いがあること自体が問題ではないということです。私たちは当然ひとりひとり違います。育ってきた環境も違えば、経験したことも違います。性格も違えば、物事の捉え方も違います。そのような違いを持っている私たちが、聖書が特に明確に命じたり、禁じていないことを前にするのであれば、そこには考え方や判断、選択に違いが生じることは普通にあります。だからこそそのような違いを見る時に、私たちがどのように兄弟姉妹を扱うのかということが大切な問題でした。そしてそれこそがまさに私たちが今見ているローマ14章で扱われている内容でもあったのです。

当時のローマ教会の中には、食べ物に関して異なる考え方を持っている人たちがいました。また、ある日を特別な日として重んじる人もいれば、すべての日は同じだと考える人たちもいました。教会の中には違いというものが存在していました。しかしその違いを見た時に、ある人たちは自分の基準を押し付けて人をさばきました。別の人たちは、自分とは異なる人たちを軽蔑しました。本来であれば、主にあって一致すべき教会の中であって、違いによって争いが起こっていたのです。だからパウロはことばを綴りました。兄弟姉妹に自分との違いがあった時、それを目にした時、どうすればいいのかということを経験を通して、人々が互いをますます愛し合う者として成長していくようにと勧めました。

○建設現場で起きる問題：“違い”を見る時に覚えるべき七つの真理

今回の箇所では、違いを見る時に、特に私たちが心に留めるべき七つの真理が教えられています。先週はそのうちの二つを見ました。一つ目に、兄弟姉妹の間には違いが存在していることを覚えておきましょう、そして二つ目に、さばくのではなく、受け入れることを私たちは実践しましょうということを見ました。きょうはその続き、三つの真理を見てみたいと思います。違いがある兄弟姉妹と争うのではなく

て、どのようにして一致を保って歩めるのか、そのことをみことばから考えてみましょう。

ローマ 14 : 1－12

「:1 あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。:2 何でも食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。:3 食べる人は食べない人を侮ってはいけなし、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。:4 あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。:5 ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。:6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。:7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。:8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。:9 キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。:10 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。:11 次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」:12 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」

3. 自分は他の人の主人ではない 4 節

では、三つ目の真理からいっしょに考えてみましょう。私たちが違いを見る時に心に留めるべきこと三つ目は、自分はほかの人の主人ではないということです。違いを持っている兄弟姉妹を目にするのであれば、私たちは自分の立場をよく覚えていないといけません。私たちはだれひとりとしてほかの人をさばくことができるような権威を持つ主人ではないからです。4 節にこのように明白に言われていました。「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」と。ここで注目してほしいのは、「他人のしもべ」ということばです。

▶「他人」

二つに分けて考えますけれども、一つ目に、「他人の」ということばが出てきました。「他人」というのは単純に自分以外のだれかのことを指しているものではありません。このことばには、もともと「ほかの人に属するもの」とか「自分のものではないもの」という意味が含まれていました。同じことばはルカ 16 : 12 にもこのように出てきます。「また、あなたがたが他人のものに忠実でなかったら、だれがあなたがたに、あなたがたのものを持たせるでしょう。」と。「他人のもの」と訳されていましたが、それが同じことばです。つまり「他人のもの」というのは、自分自身のものではない別のだれかの所有物のことです。あたりまえですけれども、自分の持ち物でないものは自分の好き勝手にできるものではありません。

▶「しもべ」（ギリ語：オイケテス）

また二つ目に出てきていた「しもべ」ということばには、実は珍しいことばが使われています。聖書をよく知っている皆さんであれば、「しもべ」、「奴隸」と聞くと、「デューロス」ということばを思い浮かべるかもしれません。確かにそのとおりで、新約聖書を見れば、この「奴隸」ということばには「デューロス」ということばが最も頻繁に使われます。でも、ここでの「しもべ」ということばにはそのことばは使われていませんでした。代わりに使われていたのは、「オイケテス」ということばでした。「家」という意味の「オイコス」からきている「オイケテス」というのは、「もともと家に属するもの」という意味があって、そこから「家の中で仕えるしもべ」、「家内奴隸」を表すことばとして用いられたものでし

た。そんなことばがここには用いられていたのです。私たちの家に奴隷はいないですから、今の私たちにはあまりピンと来ないかもしれません。でもこの当時の家には、さまざまな役割を担っている奴隷たちが住んでいました。家事をしてくれたり、掃除をしたり、主人や家族の身の回りの世話をしたり、またある者は家庭教師として勉強を教えたり、ある者は信頼を受けていれば家の財産を管理したりすることもありました。“オイケテス”というのは、その家に属している者として、その家の主人の指示に従って働きました。このしもべが責任を負っていたのは、ほかのだれかではありません、ほかのしもべでもありません、自分自身の主人でした。

ではこれらのことを踏まえて、もう一回パウロのことばの言わんとしていることを考えてみてください。パウロは4節で「あなたはいったいだれなので、他人のしもべをさばくのですか。」と問いかけていました。「しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です」、言われていることは明白でした。私たちがさばいてしまうようなほかの兄弟姉妹は、そもそも私たちの所有物ではないということです。彼らはほかの人、もっと言うのであれば、主であるイエス様のしもべでした。そのしもべがやっていることをよしとして認めるのも、よしとして認めないのも主人の判断です。そのしもべが責任を負っているのは、主人であるイエス様に対してであって、私たちではありません。しもべは主人に喜ばれることを熱心になそうとします。だとすれば、私たちにほかの兄弟姉妹をさばく権利があるのでしょうか。同じ主のしもべとして生きている私たちに、自分の考えや自分の意見、自分のやり方と違う人たちを、あの人は間違っていますと断罪する権利などあるのでしょうか。その権利は、本来どこにもないということです。自分のものでもない「他人のしもべ」を私たちが好き勝手に扱うようなことはできないのです。

仮に、私たちがだれかの家を訪問したとします。そして訪問した家で子どもが一生懸命に皿洗いや洗濯物をたたんでいる様子を見ました。そのやり方が自分のやり方と違うと、私たちは横から口出しするのでしょうか。その家の両親は、ありがとうと認めているのにもかかわらず、間違ってますと非難するのでしょうか。多分そんなことはだれもしないでしょう。もしそんなことをすれば、親からこう言われるでしょう。私たちはこれで満足しています、私たちはこの方法でやりなさいと教えましたと。そんなことを言うあなたはいったい何様ですかと。同じことです。私たちには主のしもべとして生きているその兄弟姉妹のことを勝手にさばく権利は与えられていません。私たちは自分の意見、自分のやり方を押しつける権威も持っていません。いろいろな弱さを持ち、自分とは違う信仰者を主のしもべとして立たせることができるのは主人である主ご自身です。主がその人のことをご自分のしもべとして受け入れておられるのであれば、回りの私たちが納得するかどうかは関係ありません。「他人のしもべ」を自分たちの基準に当てはめて非難する権利は私たちのだれにも与えられてはいないのです。

でもここで勘違いしてほしくないことがあります。これは私たちがいっさいさばきをしないという話をしているわけではありません。ある人たちはこのような箇所を引き合いに出して、自分のことを責める人たちを訴えることがあります。クリスチャンが互いをさばき合うことは、全部間違っています。責めるということは愛ではありませんと。私をさばくあなたは何様ですかと。でも聖書はそんなことを教えていません。確かに私たちは聖書で明確に述べられていないことに関して、互いを責めるようなことはしません。ローマ14章の文脈も考えてみてください。ここでテーマになっていることは、罪の問題ではありません。これを食べてもいいのかな、これは食べてはだめなのかな、この日を守るべきなのかな、この日は守らないでいいのかなという良心の問題の話をしています。そして聖書に明確に書かれていないことに関して、私たちの態度はどうあるべきかと言うと、私たちは互いを責めるのではなく、互いをさばくのではなく、喜んで互いを受け入れ合おうとします。

しかし、聖書で明確に述べられていることに反している罪を見るなら、私たちは相手のことを愛するからこそ、その罪を正しく扱おうとします。マタイ18:15に「また、もし、あなたの兄弟が罪を犯したなら、行って、ふたりだけのところで責めなさい。」と書いてあるのを、私たちはよく知っています。この「責

めなさい」ということばには「叱責する」とか「非難する」という意味まで含まれています。「行って、非難しなさい」と。でも私と違う好みを見たから、私と違うやり方を見たから行きなさいとは書いていませんでした。「あなたの兄弟が罪を犯したなら」、あなたの兄弟がみことばがはっきりと言っていることに関して、神様がノーだと言っていることに関して、反しているのを見たのであれば、その時は行って責めなさい、それを通して愛を示しなさいと。Ⅰコリント5：11-13には、「：11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしめる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてはいけない、ということです。：12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。：13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」と。罪の中を歩んでいる兄弟姉妹を見るのであれば、私たちの責任は愛をもってその罪を指摘して、悔い改めるように促すことだということです。

教会の中に、罪をそのまま放置してはいけないということです。だから行って責めましょうと。その人を嫌っているからではありません。その人のことを愛しているから、その人がその人の愛している主のもとに立ち返ることを心から願うから、私たちはそこから離そうとする罪を正しくへりくだって責めるわけです。私たちは、聖書が明確に罪としていること、主の基準に反している罪は、いつでも愛をもって正しく取り扱おうとします。でも、聖書が明確に命じていない事柄については、私たちは自分の基準を主の基準のようにして押しつけることはしません。自分の好み、自分の意見によってだれかのことをさばくようなことはしません。私たちはみんな同じ主に仕えているしもべ同士であることを忘れてはいけません。私たちはしもべであって、主人ではありません。私たちがだれかの罪を責める時、私たちが伝えることは主の権威であるみことばです。しもべはしもべ同士でさばくことはしません。だれかの主人に勝手になることもしません。自分はほかの人の主人ではありません、その立場こそ、いつでも私たちが違いを見る時に、心に留めるべき三つ目の真理でした。

4. 主のために生きている 6-9 節

私たちが違いを見る時に心に留めるべきことの四つ目は、主のために生きているということです。シンプルです。私たちは何をするにしても、自分のためではなくて主のためにすべてのことをなしています、主のために生きています。そのゴールを覚えていることが大切でした。

▶「主のために」

6-8 節にこんなふうに書いています。「：6 日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。：7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。：8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。」と。この箇所を一言でまとめるとしたら、「主のために」ということになると思います。パウロはこの短いたった3節の間に、「主のために」という表現を5回使っていました。「日を守る人は、主のために守」り、「食べる人は、主のために食べ」、「食べない人も、主のために食べない」で、「生きるなら、主のために生き」、「死ぬなら、主のために死」にますと。何がポイントでしょう？信仰者は何をするにしても主のために、主の栄光が現されるためにしますと。とってもシンプルですが、すごく大切なことです。私たちは何かをする時も、しない時も、私たちは何かを楽しむ時も、何かを控える時も、自分のためにすることはいっさいないということです。私たちは文字どおりすべてのことについて主に対する感謝の思いからそのことをします、そのために私たちは生きていますと。

大切なことなので、よく考えてみてください。この当時の教会の姿に戻りますけれども、当時の教会にはどんな人たちがいたでしょう。ある人たちは、イエス様にある自由というものを覚えて、何でも食べて

いいと確信していました。すべての食べ物は清いのですと主が宣言されたから、彼らは肉でさえも主のために喜んで食べていたのです。神様、恵みによってあなたが与えてくださったものを私は主のために喜んで感謝して食べますと。その一方で、ある人たちは同じイエス様にある自由を前にしても、何でも食べていいという確信を持つことができませんでした。救われる以前の歩みが肉を食べることに対するためらいや責めを生み出していました。

でも同時に、そんな彼らも食べないという選択をしながらも食べられる野菜を、主のために喜んで食べていたのです。神様、感謝しますと、恵みによってあなたが与えてくださったものを、私は主のために食べますと。そうすると、彼らのうちどちらかは間違っていたのでしょうか。食べる方がすぐれていて、食べない方は劣っています、そんなことになるのでしょうか。もちろんそんなことにはなりません。主に感謝して、主の栄光のために喜んでなされたことであるのであれば、どちらにしても主の前に喜ばれるものでした。だからこそ確信を持って自由に食べている人が食べない人のことを見下すことはできないし、食べない人たちが食べる人たちのことを汚れていると、さばくこともできません。結局のところ問われているのは、何をするのかということ以上に、だれのためにしているのかということでした。それぞれが自分自身のためではなく、主のために、主の栄光を現そうと感謝を持って何かをしているのであれば、それは互いの間で尊重し合うべきものになるというわけです。

私たちは主のために生きています、この6-7節は私たちの歩みにいつでも当てはめることができます。私たちは何かをする時にいつでも自分自身に問うことができます。自分はこのことをしようと思っているけれども、このことを喜んで感謝をもって、主の栄光を現すためにできるでしょうかと問い続けることができます。もしその問いに対して、自分の中でノーというものがあるのであれば、それはしないことです。私たちは主のために生きています。自分のためではありません。そしてもし私たちがこの視点を忘れてしまえば、そこには当然さばく思いが出てきます。もし私たちが主はどう思われるのか、主が喜んでくださるだろうかということを忘れて、私はどう思うのか、私にとって喜びになるだろうか、私にとってこれは心地よいものだろうか、そのことを常に問い始めれば、間違いなくすべてのことが自分中心になっていきます。私たちの心が“主のために”から、“自分のために”になれば、自分の考えや自分の意見が次第にほかの人を測る基準になっていきます。私はこうするのが正しいと思います、私はこういうやり方でやってきました、私はこのやり方が好きです、私はこのようにしていますと。すると、いつの間にかどうしてあなたは私と同じように考えないのですか、どうしたあなたは私と同じようにしないのですかという非難に変わっていきます。「私はこうする」という、本来は主のためにと考えていた選択ですら、「あなたもこうすべき」というほかの人に対する要求に変わってしまうこともあるのです。その時私たちはだれのためにしているのかを忘れてしまっています。さばく思いがある時に、“主のために”という思いはどこかに消え去っています。

少し立ち止まって、自分の教会生活を振り返ってみてください。言うまでもなく、日々私たちはいろいろな場面で違いというものをしています。家庭内での夫婦の時間、子育ての仕方、平日や休日の過ごし方、教会内での兄弟姉妹との交わり、礼拝のスタイルや奉仕のやり方もありとあらゆる場面であって、聖書が明白に命じていない部分での違いは、私たち目の当たりにしています。その違いを目にする時、私たちは普段どのように応答しているでしょう。自分の考えややり方と違っていても、その人が主のために喜んで、主に感謝してなしているのであれば、私もそのことを主に感謝できると、喜んでいてでしょうか。それとも自分と違う姿を見ることによって、いや、あの人は間違っています、あの人のやり方は何か気に食いませんと、そうやって心の中で不平不満を口にしているのでしょうか。正直になれば、私たちはいろいろな場面でさばきます。頭では、主のために私たちは生きていくべき、私たちは違いを受け入れるべきとわかっているのに、気づかないうちに自分のことにだけ目を留めて、ほかの人のことをさばいてしまう、私たちはそんな弱さを持っています。自分中心になってしまうのです。

どうすれば、その自分中心から離れて、主を中心にする者として、生きていくことができるのでしょうか。成長し続けることができるのでしょうか。その答えは、いつでも福音を覚えていることです。みことばを見てください。パウロはこんなことを教えます。私たちが生きるにしろ、死ぬにしろ、主の者だと8節で述べた後、人々に福音の真理を思い出させていました。9節に「キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。」とあります。なぜパウロはここでキリストの死と復活に目を向けさせたのでしょうか。それは、イエス様が十字架で死なれ、死者の中からよみがえられた救いの目的こそ、私たちを自分のために生きる者から主のために生きる者へと変えるものだったからです。かつての私たちは神様に逆らい、自分が中心に生きていました。自分の基準が絶対だという罪の中を歩んでいました。自分の肉の欲の中を生きていて、自分の肉と心の望むままを行っていました。だからこそ私たちはみんな生まれながらに神の御怒りを受けるべき存在でした。でもその罪の奴隷から解放するために、イエス様はご自身のいのちを、あの十字架の上でささげてくださいました。最高の代価をあの十字架で払ってくださいました。

Ⅱコリント5：15にこうあります。「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」と。もう1か所、ガラテヤ2：20にもパウロ自身のあかしが書いてあります。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」と。忘れてはいけません。罪の中を歩んでいて、自分のために生きていた古い私たちが死んで、新しくされた私たちは、生きている時も、死ぬ時も、もはや自分のためには生きていません。新しくされた人生というのは、自分のものではありません。十字架と復活によって、私たちを買い取ってくださったイエス様のものです。私たちに愛を示してくださったイエス様のものです。だから私たちは何をするにしても主のためにしようとしします。それは同時に、私たちがさばいてしまうようなほかの兄弟姉妹も、イエス様は同じようにしてご自分のいのちを捨てて、ご自分のものとされた大切な存在だということです。私たちが自分の基準に固執して、兄弟姉妹をさばいてしまいそうになる時こそ、私たちはいつでも十字架と復活というものを見上げ続ける必要があります。イエス様は、私のためにも、そしてこの相手のためにも死んでくださいましたと。同じ主にあって私たちは主のために生きる者へと変えられました。この人も主に感謝しながら、主のために歩もうとしているのだ、私たちが主の犠牲に目を留めるのであれば、私たちは自分のやり方を押しつけようとはしません。すべてが主のためだという同じゴールへと向かっている仲間として、私たちは互いを、兄弟姉妹を励まし合い続けることができます。だれも自分のために生きている者はいません。私たちは主のものとして、主のために生きています。自分の基準ではなくて、主を通して互いの違いを受け入れること、それこそが四つ目に心に留めるべき真理でした。

5. 真のさばき主の前に立つ 10-12節

そして、私たちが違いを見る時に心に留めるべきことの五つ目は、真のさばき主の前に立つということです。パウロは互いをさばき合っていた兄弟姉妹に向かって厳しく問いかけました。10節「それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか」、こう始まっています。確認のために、ここで自分の兄弟をさばいていたのは、信仰の弱い人のことです。弱い人たちというのは、自分たちのように食べ物を控えたり、特定の日を守ろうとしない人たちのことを勝手に罪に定めようとしていました。自分の兄弟を侮っていたのは、信仰の強い人のことです。強い人というのは、弱い人の持っているこだわりとか制約を愚かなものだと見下してしていました。ローマの教会の中には、同じ主を愛している兄弟姉妹たちが互いの違いを受け入れることができずにいがみ合っていたのです。だからパウロは片方にだけではありません。信仰の弱い人にも、信仰の強い人にも、その両者に対して互いをさばいてはいけませんと強く訴えていました。

でも、互いにさばき合うこと、さばきを下し合うことはなぜ問題なのでしょう。パウロはその理由をはっきりと述べています。10－12節「:10 ……私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。:11 次のように書かれているからです。「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」:12 こういうわけですから、私たちは、おのこの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」と。どうして私たち自身がさばきを下すことが問題なのでしょう。それは私たち自身がいつの日か神のさばきの座に立つようになるからです。私たち自身がいつの日か、神のさばきの座に立つようになるからです。ここにわたしが忘れてはいけない大切な現実が記されています。私たちは兄弟姉妹の歩みを見て、この人は正しい、この人は間違っていると、勝手にジャッジすることがあります。ほかの人の姿はよく見えるからこそ、それを評価することに私たち心がとらわれることがあります。私たちは外に目が向きやすいのです。でもそんな外に引きやすい、人に向きやすい私たちの視線を、パウロは自分自身へと向けさせていました。ほかの兄弟姉妹をさばいているあなた自身が、最後には神様の前に立ちますと。

特に12節で「おのこの自分のことを神の御前に申し開きする」と言われていました。この「申し開きする」というのは、主の前で自分について説明する、報告するといった意味が含まれています。主人から何かを任されている者たちが、任されたものをどのように扱ってきたのかを主人に報告するようなイメージです。私たちは神の御前で申し開きをします。どういうことでしょうか？私たちは神様から与えられた人生をどのように生きてきたのか、与えられていた時間をどのように使ってきたのか、与えられた賜物をどのように用いたのか、主から与えられた自由を主のためにどのように使ったのか、そして兄弟姉妹に対してどのような態度を取ったのか、そのすべてについて私たちはいつの日か主の前に立ち、主から問われることになるということです。パウロは別の箇所でも同じ真理を教えていました。Ⅱコリント5:10にもこう書いています。「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。」と。もちろん勘違いはしないでください。信仰者が立つこの神のさばきの座というのは、その人が救われているかどうかを決めるためのさばきではありません。私たちのすべての罪を背負って死なれたイエスを信じている者たちが罪のさばきに遭うことはもうありません。ローマ8:1にも「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」と言われていました。私たちの罪を負って死んでくださり、すべての罪を赦してくださったイエスのうちにある者が罪に定められることはもうありませんよと。

では、ここでのさばきとは何のことでしょう。このさばきというのは、信仰者の忠実さに対する報いの場です。ひとりひとりが主の前に立って、その歩みでなしてきたことに応じてふさわしい評価、さばきというものを受けるのです。その日がひとりひとりにやって来ます。だから私たちは大切なこととして覚えておかないといけません。私たちは互いの意見や選択について最終的な判断を下す裁判官ではないということです。むしろ私たち全員が真のさばき主の前に立ってさばかれる立場だということです。キリストだけがご自分のしもべをさばく権利を持っておられるのであって、私たちにはその権利は与えられていません。少し想像してみてください。キリストのさばきの座、神のさばきの座の前に立っている場面を思い浮かべてみてください。ひとりの兄弟が、主の前で自分について申し開きをしようとしています。そしてその時に、あなたがキリストの前に割って入って行って言うわけです、「主よ、すみません。ちょっと口出しさせてください」と。「私はこの人のことをよく知っているんです、主にある自由の問題に関して私はこの人と違います。私には正しくないと思う考えを持っているんです。私には納得できないやり方を行っているんです」と。「だから主よ。今回は、あなたに代わって私にさばきを任せてください、あなたに代わって私がさばきます」と。こんなふうに言えば、私たちのだれもそんな恐れ多いことなんて自分はしませんが口にするでしょう。でも、もしわたしが自分の基準でさばいているのであれば、私たちはまさにそれをしていることと同じだということです。私たちは、真のさばき主である主の手を差し押

さえて、私が私の基準でこの人をさばきますと、キリストだけが持っている権利を勝手に自分のものとして扱っているということです。主のしもべである私たちにとって、その態度は当然ふさわしいものではありません。そしてその間違っただけの自分の態度ですら、いつの日か主の前に立ってさばかれると言うわけですね。

だとすれば、私たちにできることは、違いを持っているその兄弟姉妹のことを喜んで受け入れることです。また何よりもほかの人をさばくことから自分自身の心をよく吟味し続けることです。清教徒のひとりトーマス・リーという人物もこんなことばを残していました。「ですから、他の人を非難することに、あなたの信仰の熱心さを費やしてはいけません。他の人を非難するのに最も熱心な人は、いつも、自分自身を吟味することに最も無頓着な人です。」と。私たちが神のさばきの座に立つその時、主はなぜあの兄弟はあんな選択をしたのかと、だれかの歩みについて私たちに報告を求められることはありません。主が問われるのは、私が与えた恵みと自由をもってあなたはどのようにして私に忠実に仕え、そしてどのように兄弟姉妹を愛しましたかということです。そのことを問われる日が来ます。

では私たちはどう生きるでしょう。自分と同じように考えて、自分と同じような好みを持っていて、自分と同じ意見や自分と同じようなこだわりを大切にしている人を愛することというのは、ある意味で容易なことですね。世の中の人たちだってそのことをしています。その一方で、あらゆる面において自分と違っている人を愛するのは難しさが伴います。違いというものを見る時に、私たちは私たちの心の中ですぐにジャッジするような思いが出てきます。そのことを頭ではわかっているからこそ私たちは違う人を意図的であれ、意図的でなくであれ、避けたりもします。でもそうではないです。私たちはあらゆる面において、主に逆らっていました。主の聖さと私たちを見比べれば、すべての面で違っていました。でもそんな私たちを神様は主にあって受け入れてくださいました。同じローマの15:7にこう書いています。

「こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。」と。受け入れやすい人を受け入れるだけであつたとすれば、私たちは福音を知りません。でも神様がキリストにあって、私たちを受け入れてくださったということを知るのであれば、全くの違いを持っている私たちを、イエス様が十字架にあってご自身のいのちをささげて、その犠牲をもって私たちのことを受け入れてくださったということを知るのであれば、その愛を知ったのであれば、私たちは主が私たちを受け入れてくださったように互いのことを受け入れ合うことはできます。それこそが私たちが与えられた愛です。それこそが私たちに明らかにされた愛です。そして、「キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れて」くださいましたと言っていました。

私たちは今、何のために生きています？ 私たちは主のために生きています、主の栄光を現すために生きています。私たちはどんなふうにしたら主の栄光を現すことができるのでしょうか。一つの方法は、私たちが互いに受け入れ合うことです。それを通して、私たちは主が私たちに何をしてくださったのかということ、人々の目に明らかにすることができます。それを皆さん、個人としてだけではありません、教会として、ともにそんな群れを目指して続けて歩んでいきましょう。